

## 会長就任の御挨拶

東京大学 伊理 正夫



今回会長に選任されましたのを機に、日頃ORと日本オペレーションズ・リサーチ学会とについて思っておりますことを、順不同ではありますが以下に述べさせていただいて、会長就任の御挨拶に代えさせていただきます。

本学会も創立以来今年で35年になります。この間、高邁な理想を掲げて学会の設立に努力され、そして、先見性を持ちながらも堅実な方針を堅持して学会の活動を指導し、学会の伝統を築いてこられた諸先輩に、振り返って敬意の念を新たにするばかりです。私事を述べるのをお許しいただければ、学会創立の頃まだ20代半ばの学生だった私が、学会の一員に加えていただくことによって、いかに多くのことを学び、また研究活動の面でも助けられたか、はかりしれません。いま優秀な若い世代がORの実務・研究・教育の分野に続々と輩出し、国内でそして国際的にも、活躍しておられます。学会創立の初心を忘れることなく、このような方々に対して少しでもお役に立つよう努めることが、私に課せられた役目であると痛感しております。

新しい世紀に向けての変革の時代において本学会がいかにあるべきかを、いろいろな面から見直していただいております。学会の公的地位をさらに確固たるものとし、プロフェッションとしてのORを社会的によりよく認知してもらえるようにする努力は、絶えず続けなければならないと思います。

あらゆる実学についていえることではありますが、ORについては特に、学会活動において理論と実践とのバランスをよくとり、両者が互いに利しあい、刺激しあうようにしなければなりません。

ん。それこそが学会の第1の存在意義だと言っても過言でないでしょう。これは古くて常に新しい問題であるようです。欧州のOR学会連合であるEUROの中にも最近この問題を検討するグループができたというニュースを聞いております。

わが国の産業の国際競争力の成長と並行して、日本の研究活動も世界的に注目されるようになってきました。学問・研究についても、輸入の時代から輸出の時代に移ろうとしているわけです。ORにおいても、国際的に活躍する若い人たちが最近特に増えてきているのは素晴らしいことです。このような傾向はこれからもますます盛んになりました。

主としてIFORSを通じての国際的活動にも学会は長年重点を置いてきており、特にIFORSのアジアのサブグループであるAPORSについては、その設立から初期の運営の基礎作りにおいて、中心的な役割を果たしてきました。たまたま本年から3年間、皆様の御推挙で、私がAPORSの会長を仰せつかることになりました。本学会員の皆様も、ぜひ、APORSを通じての国際貢献に御協力いただきたいと存じます。

最後に、学会がわが国の未来、また世界の未来にとって重要な役割を果たせるよう、そして各会員のそれぞれの活動の共通の拠り所となるよう、これから2年間私の微力を尽くすことをお約束するとともに、皆様の御協力をお願いする次第です。